

イン諸語とよばれるグループに属する言語で、フィン語ともよばれる。

話者数は、約500万人。フィンランドの公用語の1つで、フィンランドの人口512万人の93%が母語としている(1995年推計)。フィンランド国内には、フィンランド語を母語とするフィン人のほかに、もう1つの公用語であるスウェーデン語(29.5万人)や、サーミ語(ラップ語; 1,700人)、ロシア語(15,900人)、ジプシー語などを母語とする人々もいるが、おおむね、フィンランド語との二言語生活をしている。

フィンランド語の話者、使用者としては、スウェーデン(27万人)、ソビエト連邦(7万7千人)、カナダ(4万人)、アメリカ合衆国(3万2千人)、オーストラリア(1万2千人)などに住むフィン人も考慮する必要がある。フィンランド語は、ソビエト連邦のカレリア自治共和国で、公用語に準じる地位を与えられている。

以下は、特に断わりのない限り、フィンランド語の標準語(yleiskieli)に関する記述である。

[音と文字] フィンランド語は、ラテン文字を用いて表記される。比較的新しい外来語を表記する場合を除くと、フィンランド語の表記に用いられる文字は、次の21文字である。

a, d, e, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p, r,
s, t, u, v, y, ä, ö

正書法は、1音素1文字対応のほぼ完全な音素表記である。

母音音素は8つあり、表1のような体系をなす。

〈表1〉 母音音素の体系

	前 舌		奥 舌	
	非円唇	円 唇	非円唇	円・唇
高	i	y		u
中	e	ö		o
低	ä		a	

すべての母音について、長短の対立が弁別的である。長母音と短母音の対立は、音声学的にも持続時間の差として現われ、音色の違いは観察されない。二重母音は、いずれも8つの母音音素のどれかと同定できる2つの部分に分かれて聞こえる。このため、音韻論上、長母音は同じ短母音2つの連続、二重母音は異なる2つの短母音の連続として解釈するのが通説で、正書法もこれに従っている。

tule「来い」: tuule「(風よ)吹け」: tulee「(彼が)来る」: tuulee「(風が)吹く」

voi「バター」、tie「道」、tuo「あれ」、täi「シラミ」、yö「夜」

フィンランド語には母音調和があり、8つの母音は、前母音(y, ö, ä)、後母音(u, o, a)、中立母音(i, e)の

フィンランド語 suomi (suomen kieli), 英 Finnish, 独 Finnisch, 仏 finnois, 露 финский язык
ウラル語族, フィン・ウゴル語派の中のバルト・フ

3つのグループに分かれる。同一形態素内に、前母音と後母音は混在できないが、中立母音はどちらの母音とも混在しうる。

- pöytä「机」: pouta「晴天」
- sievä「美しい」: sielu「魂」

母音調和はまた、名詞の格語尾、動詞の人称語尾、派生接尾辞、前接語(enclitic)などにもおよぶ。

- halu-kas-ta「意欲的な」(単数分格)
- äly-käs-tä「利発な」(単数分格)
- suo-vat-ko「彼らは許容するか」
- syö-vät-kö「彼らは食べるか」

フィンランド語固有の子音音素は、閉鎖音 p, t, k, d, 摩擦音 s, h, v, j, 鼻音 m, n, η, および, l と r (舌先のふるえ音)の計13個である。鼻音 η は、独自の文字がなく現われる環境も限定されており、短音(nで表記)は子音 k の直前にのみ、重音(ngで表記)は階程交替における ηk (nkで表記)の弱階程として母音間にのみ現われる。このほか、比較的新しい外来語には、b, g, f, ʃ (š, shで表記)などが現われる。

動詞の2人称命令形や、名詞派生接尾辞 -e など、一部の母音で終わる語(語形)の直後において、後続の語(または前接語)の語頭の子音が重子音として発音される現象がある。後続の語の語頭が母音の場合には、

母音間に喉頭閉鎖音が聞かれることがある。

- muuta pois [muutappois]「引越せ」
- taideteos [taidetteos]「芸術作品」
- ota omena [ota(?)omena]「リンゴを取れ」

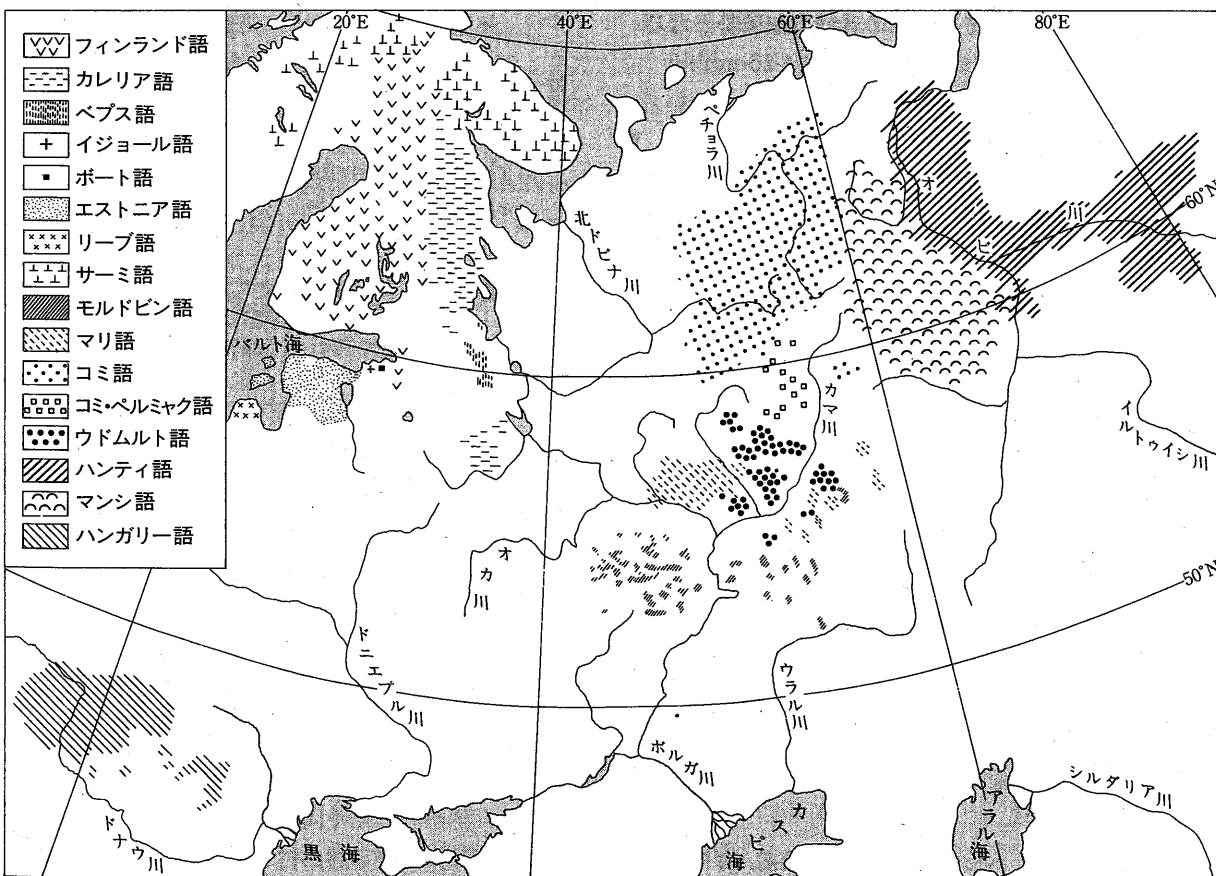
この現象の説明のために、当該の語(語形)の末尾に形態音素(*)を立てる分析(muuta*, taide*, ota*)が行なわれており、この形態音素を子音音素に含める考え方もある。

d, h, v, j, η を除く子音は、母音間において長短(単子音対重子音)の対立が可能である。

- opi「学べ」: oppi「学説」
- mato「ミミズ」: matto「じゅうたん」
- kuka「誰」: kukka「花」
- kisa「競技」: kissa「ネコ」
- palo「火事」: pallo「ボール」
- kero「岩山の頂」: kerro「語れ」
- kimo「あし毛色の」: kimmo「弾性」
- kana「ニワトリ」: kanna「運べ」

無声閉鎖音 p, t, k, および、その長音 pp, tt, kk は、階程交替(astevaihtelu, gradation, Stufenwechsel)とよばれる現象に関係する。これは、名詞(および形容詞)、動詞の語幹の特定の位置(2音節以上の長さの語幹の最終音節の直前)において、一定の

〈図〉 フィン・ウゴル語派の諸言語の地理的分布



出典：Основаы Финноугорского Языкознания (1974-76)による。

環境にある無声閉鎖音の長音が短音と交替したり(量的交替, quantity alternation), 短音が他の子音と交替するか消失したり(質的交替, quality alternation)する現象である。量的交替, 質的交替のいずれにおいても, 語幹に付く, 格語尾, 人称語尾, 派生接尾辞などの音形に応じて, 交替する閉鎖音の直後の音節が開音節となるか閉音節となるかによって, 交替形の分布がほぼ決まる。開音節の場合に現われる交替形(および, その交替形の現われる語幹)を強階程(vahva aste, strong grade), 閉音節の場合に現われる交替形(および, その交替形の現われる語幹)を弱階程(heikko aste, weak grade)と言う。名詞を例にとって, 階程交替のタイプを示すと, 表2のようになる。

語強勢に関して, 音節は, 主強勢(pääpaino)あるいは副強勢(sivupaino)があるか, もしくは無強勢(painoton)かのいずれかになる。主強勢は, 原則として語の第1音節におかれ, 多音節語の最終音節は無強勢となる(以下, 主強勢を(´), 副強勢を(˘)で表わす)。

副強勢は, 第3音節およびそれ以降の奇数番目の音節におかれ, 偶数番目の音節は無強勢となる。

ká-la, ká-las-tus

ká-las-tùk-sen, ká-las-tùk-ses-tàn-sa

ただし, 5音節以上の語で, 第3音節が短い音節(短母音で終わる開音節)の場合には, 副強勢は, 第4音節およびそれ以降の偶数番目の音節におかれ, 第2音節と第3音節以降の奇数番目の音節は無強勢となる。

ká-las-ta-màs-sa, ká-sit-tä-mät-tö-mäl-lä

複合語の強勢のパターンは, 複合語をつくっているそれぞれの構成要素ごとに, 上の一般規則を適用し, 第1構成要素の主強勢以外の主強勢を副強勢に弱めることによってえられる。

ýli-òp-pi-las-tùt-kin-to-làu-ta-kùn-ta

文のイントネーションの特徴として, 文の種類(平叙文, 疑問文, 等)に関係なく, 文末が下降音調になることがあげられる。

[語形変化と語の構造] フィンランド語の名詞

(形容詞, 数詞, 代名詞を含む)と動詞の語形変化は, 膠着性が高く, 不規則変化が少ない。

名詞は, 数(単数, 複数)と格(14格; 表3を参照)によって語形変化する。格語尾は, 大部分の場合, 単複共通であり, それぞれの格形は, 単数では「語幹+格語尾」, 複数では「語幹+複数標識+格語尾」という構造をしている。主格の語尾はゼロと考えられ, したがって, 複数主格に現われる -t は, 複数標識の異形態と見なされる。なお, 共格と具格には, 単数形と複数形の区別がない。

14の格のうち, 内格, 出格, 入格, 接格, 奪格, 向格の6つは, 場所関係を表わす格として, 「内部-外部(表

<表2> 階程交替

	強階程 (単数主格)	弱階程 (単数属格)	
tt : t	rotta	rotan	「ネズミ」
ntt : nt	juntta	juntan	「くい打ち器」
ltt : lt	telttä	teltan	「テント」
rtt : rt	karttä	kartan	「地図」
pp : p	soppa	sopan	「スープ」
mpp : mp	jumppa	jumpan	「体操」
lpp : lp	tolppa	tolpan	「くい, 柱」
rpp : rp	torppa	torpan	「小屋」
kk : k	kukka	kukan	「花」
gkk : gk	ankka	ankan	「アヒル」
lkk : lk	palkka	palkan	「給料」
rkk : rk	nurkka	nurkan	「すみ, かど」
t : d	pata	padan	「深なべ」
nt : nn	kanta	kannan	「礎」
lt : ll	silta	sillan	「橋」
rt : rr	parta	parran	「ひげ」
ht : hd	kohta	kohdan	「箇所」
p : v	lupa	luvan	「許可」
mp : mm	kampa	kamman	「くし」
lp : lv	halpa	halvan	「安い」
rp : rv	arpa	arvan	「くじ」
k : φ	haka	haan	「止め金」
k : v	puku	puvun	「服」
gk : gñ	lanka	langan	「糸」
lk : l	jalka	jalan	「足」
lk : lj	olki	oljen	「わら」
rk : r	virka	viran	「職務」
rk : rj	kurki	kurjen	「ツル」
hk : h	uhka	uhan	「脅威」
hk : hj	pohkeen	pohje	「ふくらはぎ」

注: 「ふくらはぎ」の例のみ, 強階程が単数属格, 弱階程が単数主格。

面, 近傍)」と「静止位置一起点-到着点」の2つの基準により, 表4のような体系をなす。

名詞には, 所有者を表わす接尾辞(所有接尾辞, possessive suffix; 表5)が付いて, 「私の家で」「あなたの家から」のような意味を表わすが, その場合, 所有接尾辞は, 格語尾の後ろに付く。所有接尾辞は, 1人称と2人称では, 所有者が単数であるか複数であるかが区別されるが, 3人称ではその区別はない。単数主格, 単数属格, 複数主格の3つは, 所有接尾辞が付くと, 形がまったく同じになる。14の格のうち, 共格は, 常に所有接尾辞が付いた形で用いられる。3人称の所有接尾辞は, -nsa/-nsä が本来の形であるが,

主格, 属格, 入格, および, -aa/-ää で終わる単数分格形以外では, 「語末の母音の長音化+n」を用いるのが普通である。また, 話しことばでは, 「名詞+所有接尾辞」の構造はほとんど用いられず, 代わりに「人称代名詞の属格形+名詞」が一般的である。

形容詞は, 名詞を修飾する場合に, 名詞と, 数と格において一致する。

iso talo, iso-ssa talo-ssa, iso-i-ssa talo-i-ssa
(それぞれ, 「大きな家」の単数主格, 単数内格, 複数内格)

この場合, 所有接尾辞は, 名詞にのみ付き, 形容詞には付かない。

iso talo-ni, iso-ssa talo-ssa-ni (それぞれ, 「私の大きな家」の単数主格, 単数内格)

形容詞の比較級, 最上級は, それぞれ, 語幹に接尾辞 -mpi, -in を付けてつくる。

iso, iso-mpi, iso-in (それぞれ, 「大きい」の原級, 比較級, 最上級)

「数詞+名詞」の構造では, 名詞が単数形で現われる。1 (yksi)以外の数詞が主格のとき名詞が分格となる点を除き, 数詞と名詞は, 格において一致する。たとえば,

kaksi talo-a 「2軒の家 (kaksi 「2」は主格, talo-a は talo 「家」の分格): kahde-n talo-n (属格): kah-ta talo-a (分格): kahte-en talo-on (入格): kahde-lle talo-lle (向格)

動詞は, 人称 (単数, 複数の1人称, 2人称, 3人称の6つのほかに, 「受動形 passiivi」とよばれる不定人称形がある), 時制 (現在 preesens, 過去 imperfekti, 現在完了 perfekt, 過去完了 pluskvamperfekti), 法 (直説法 indikatiivi, 条件法 kondi-

tionaali, 可能法 potentiaali, 命令法 imperatiivi) によって語形変化する(表6)。

ただし, 4つの時制が区別されるのは直説法のみで, ほかの法では, 単純時制と完了時制の区別がされるのみである。動詞の変化形は, 完了時制では, 英語の be 動詞にあたる olla 動詞の変化形と本動詞の過去分詞形を用いて表わされ, 過去分詞には, 主語の単数, 複数の別が表示される。単純時制の動詞の形は, 直説法現在が「語幹+人称語尾」, 直説法過去が「語幹+過去標識(-i)+人称語尾」, 条件法現在が「語幹+条件法標識(-isi)+人称語尾」, 可能法現在が「語幹+可能法標識(-ne)+人称語尾」, 命令法現在が「語幹+命令法の人称語尾」という構造をしている。受動形は, 語幹に受動の標識 (-tt(a)-/tt(ä)- ~ -t(a)-/t(ä)-) が付いた受動語幹から導かれる。否定形は, 否定動詞と本動詞を用いて分析的に表わされ, 否定動詞が人称変化(ただし, 受動では3人称単数形が用いられる)し, 受動, 時制, 法(場合によっては, 主語の単数, 複数の別も)は本動詞に表示される。ただし, 命令法では, 否定動詞が特別の語幹と人称語尾をもつ。動詞に不定形 (non-finite forms; 不定詞, 分詞)が多い(表7)のもフィンランド語の特徴である。

派生接尾辞が非常に多く, 1つの語根 (ないし語幹) からさまざまな派生語がつくられる。たとえば, 語根 kirja 「本」(古くは, 「しるし, 符号」を意味した)から,

kirje 「手紙」, kirjasto 「図書館」, kirjain 「文字」, kirjava 「色とりどりの」, kirjallinen 「書かれた, 文学に関する」, kirjoittaa 「書く」, kirjata 「書留にする」, kirjoa 「ししゅうする」, kirjailla 「著作活動をする」

〈表3〉 名詞 talo 「家」の格変化

		単数	複数
主格	(nominatiivi, 英 nominative)	talo	talo-t
属格	(genetiivi, 英 genitive)	talo-n	talo-j-en
分格	(partitiivi, 英 partitive)	talo-a	talo-j-a
内格	(inessiivi, 英 inessive)	talo-ssa	talo-i-ssa
出格	(elatiivi, 英 elative)	talo-sta	talo-i-sta
入格	(illatiivi, 英 illative)	talo-on	talo-i-hin
接格	(adessiivi, 英 adessive)	talo-lla	talo-i-lla
奪格	(ablatiivi, 英 ablative)	talo-lta	talo-i-lta
向格	(allatiivi, 英 allative)	talo-lle	talo-i-lle
様格	(essiivi, 英 essive)	talo-na	talo-i-na
変格	(translatiivi, 英 translative)	talo-ksi	talo-i-ksi
欠格	(abessiivi, 英 abessive)	talo-tta	talo-i-tta
共格	(komitatiivi, 英 comitative)		talo-ine-
具格	(instruktiivi, 英 instructive)		talo-in

<表 4> 場所格(local cases)の体系

	内部格 (interior local cases)	外部格 (exterior local cases)
静止位置 「〜で」	内格: -ssa/-ssä 「〜の中で」	接格: -lla/-llä 「〜の上(表面, 近傍)で」
起 点 「〜から」	出格: -sta/-stä 「〜の中から」	奪格: -lta/-ltä 「〜の上(表面, 近傍)から」
到着点 「〜へ」	入格: -(h)Vn, 「〜の中へ」	向格: -lle 「〜の上(表面, 近傍)へ」

例: 内格/接格

Mikko on nyt järve-ssä / järve-llä.

ミッコ いる 今 湖(内格) 湖(接格)

「ミッコは今湖の中にいる/湖の辺にいる」

出格/奪格

Mikko tulee järve-stä / järve-ltä.

くる (出格) (奪格)

「ミッコは湖から(上がって)やってくる/湖の辺からやってくる」

入格/向格

Mikko menee järve-en / järve-lle.

行く (入格) (向格)

「ミッコは湖へ(入って)行く/湖の辺へ行く」

のような語が派生され、さらに、これらの語から、それぞれ、たとえば、次のような語が派生される。

kirjeitse「手紙で」、kirjastollinen「図書館に関する」、kirjaimisto「アルファベット」、kirjavuus「変化にとむこと」、kirjallisuus「文学、文献」、kirjoitus「書くこと」、kirjaus「登録」、kirjonta「ししゅう」、kirjailija「作家」

フィンランド語の派生接尾辞の例を、表8にあげる。

複合語も頻繁に用いられ、非常に長い単語もめずらしくない。

yli|oppilas|tutkinto|||lauta|kunta 「大学生試験委員会」

複合名詞(複合形容詞)には、次の3つのタイプがある。

1) 第1構成要素が主格形または語幹形

kirjoitus|kone「タイプライター」(kirjoitus「書くこと」は、主格形)

ihmis|kunta「人類」(ihmis- は、ihminen「ヒト」の語幹形)

2) 第1構成要素が属格形

kansa-n|talous「国民経済」

tumma-n|ruskea「こげ茶色の」

3) 第1構成要素がそれ以外の格形(表9)

3のタイプは、第2構成要素が動詞から派生した名詞

<表 5> 所有接尾辞

	単 数	複 数
1 人称	-ni「私の」	-mme「私たちの」
2 人称	-si「あなたの」	-nne「あなたたちの」
3 人称	-nsa/-nsä ~ -Vn 「彼(女)の、彼(女)らの」	
「私の家」		
	単 数	複 数
主 格	talo-ni	talo-ni
属 格	talo-ni	talo-j-e-ni
分 格	talo-a-ni	talo-j-a-ni
内 格	talo-ssa-ni	talo-i-ssa-ni
向 格	talo-lle-ni	talo-i-lle-ni
「私たちの家」		
主 格	talo-mme	talo-mme
属 格	talo-mme	talo-j-e-mme
分 格	talo-a-mme	talo-j-a-mme
内 格	talo-ssa-mme	talo-i-ssa-mme
向 格	talo-lle-mme	talo-i-lle-mme
「あなたの家」		
主 格	talo-si	talo-si
属 格	talo-si	talo-j-e-si
分 格	talo-a-si	talo-j-a-si
内 格	talo-ssa-si	talo-i-ssa-si
向 格	talo-lle-si	talo-i-lle-si
「あなたたちの家」		
主 格	talo-nne	talo-nne
属 格	talo-nne	talo-j-e-nne
分 格	talo-a-nne	talo-j-a-nne
内 格	talo-ssa-nne	talo-i-ssa-nne
向 格	talo-lle-nne	talo-i-lle-nne
「彼(女)の家; 彼(女)らの家」		
主 格	talo-nsa	talo-nsa
属 格	talo-nsa	talo-j-e-nsa
分 格	talo-a-an (~nsa)	talo-j-a-an (~nsa)
内 格	talo-ssa-an (~nsa)	talo-i-ssa-an (~nsa)
向 格	talo-lle-en (~nsa)	talo-i-lle-en (~nsa)

(形容詞)であるのが通例で、対応する動詞句があるという特徴がある。厳密な意味での複合動詞はまれで、複合動詞に見えるものは、複合名詞からの逆成(back formation)であることが多い。

huuto|kaupata「競売する」<huuto|kauppa「競売」

副詞や後置詞の中には、格語尾が識別可能なものが多くある。

〈表 6〉 動詞 **puhua** 「話す」の語形変化(完了時制形を除く)

〔肯定形〕

〈直說法現在〉			〈直說法現在完了〉		
単	1	puhu-n 「私は話す」	単	1	olen puhu-nut
	2	puhu-t		2	olet puhu-nut
	3	puhu-u		3	on puhu-nut
複	1	puhu-mme	複	1	olemme puhu-neet
	2	puhu-tte		2	olette puhu-neet
	3	puhu-vat		3	ovat puhu-neet
受動		puhu-ta-an	受動		on puhu-ttu
〈直說法過去〉			〈直說法過去完了〉		
単	1	puhu-i-n 「私は話した」	単	1	olin puhu-nut
	2	puhu-i-t		2	olit puhu-nut
	3	puhu-i		3	oli puhu-nut
複	1	puhu-i-mme	複	1	olimme puhu-neet
	2	puhu-i-tte		2	olitte puhu-neet
	3	puhu-i-vat		3	olivat puhu-neet
受動		puhu-tt-iin	受動		oli puhu-ttu
〈条件法現在〉			〈条件法完了〉		
単	1	puhu-isi-n 「私は話すであろう」	単	1	olisin puhu-nut
	2	puhu-isi-t		2	olisit puhu-nut
	3	puhu-isi		3	olisi puhu-nut
複	1	puhu-isi-mme	複	1	olisimme puhu-neet
	2	puhu-isi-tte		2	olisitte puhu-neet
	3	puhu-isi-vat		3	olisivat puhu-neet
受動		puhu-tta-isi-in	受動		olisi puhu-ttu
〈可能法現在〉			〈可能法完了〉		
単	1	puhu-ne-n 「私はたぶん話すであろう」	単	1	lienen puhu-nut
	2	puhu-ne-t		2	lienet puhu-nut
	3	puhu-ne-e		3	lienee puhu-nut
複	1	puhu-ne-mme	複	1	lienemme puhu-neet
	2	puhu-ne-tte		2	lienette puhu-neet
	3	puhu-ne-vat		3	lienevät puhu-neet
受動		puhu-tta-ne-en	受動		lienee puhu-ttu
〈命令法現在〉			〈命令法完了〉		
単	2	puhu 「話しなさい」	単	3	olkoon puhu-nut
	3	puhu-koon			
複	1	puhu-kaamme	複	3	olkoot puhu-neet
	2	puhu-kaa			
	3	puhu-koot	受動		olkoon puhu-ttu
受動		puhu-tta-koon			

täällä/täältä 「ここで/ここから」, ulkona/ulkoa 「外で/外から」, lähellä/läheltä/lähelle 「(～の) 近くで/近くから/近くへ」, edessä/edestä/eteen 「(～の) 前で/前から/前へ」, luona/luota 「(～の) 許で/許から」

また、日本語のいわゆる形式名詞に相当する名詞の格

形が、後置詞として用いられることも多い。

väli 「間隔, すきま, あいだ」 > välissä/välistä/väliin 「(～の) 間で/間から/間へ」

【文の構造】 フィンランド語の文の基本的語順は、「主語-動詞-その他の成分」で、形容詞修飾句、属格名詞句、および、数詞は、ともに修飾される名詞に先行す

〔否定形〕

<直説法現在>				<直説法現在完了>			
単	1	en	puhu	単	1	en	ole puhu-nut
	2	et	puhu		2	et	ole puhu-nut
	3	ei	puhu		3	ei	ole puhu-nut
複	1	emme	puhu	複	1	emme	ole puhu-neet
	2	ette	puhu		2	ette	ole puhu-neet
	3	eivät	puhu		3	eivät	ole puhu-neet
受動		ei	puhu-ta	受動		ei	ole puhu-ttu
<直説法過去>				<直説法過去完了>			
単	1	en	puhu-nut	単	1	en	ollut puhu-nut
	2	et	puhu-nut		2	et	ollut puhu-nut
	3	ei	puhu-nut		3	ei	ollut puhu-nut
複	1	emme	puhu-neet	複	1	emme	olleet puhu-neet
	2	ette	puhu-neet		2	ette	olleet puhu-neet
	3	eivät	puhu-neet		3	eivät	olleet puhu-neet
受動		ei	puhu-ttu	受動		ei	ollut puhu-ttu
<条件法現在>				<条件法完了>			
単	1	en	puhu-isi	単	1	en	olisi puhu-nut
	2	et	puhu-isi		2	et	olisi puhu-nut
	3	ei	puhu-isi		3	ei	olisi puhu-nut
複	1	emme	puhu-isi	複	1	emme	olisi puhu-neet
	2	ette	puhu-isi		2	ette	olisi puhu-neet
	3	eivät	puhu-isi		3	eivät	olisi puhu-neet
受動		ei	puhu-tta-isi	受動		ei	olisi puhu-ttu
<可能法現在>				<可能法完了>			
単	1	en	puhu-ne	単	1	en	liene puhu-nut
	2	et	puhu-ne		2	et	liene puhu-nut
	3	ei	puhu-ne		3	ei	liene puhu-nut
複	1	emme	puhu-ne	複	1	emme	liene puhu-neet
	2	ette	puhu-ne		2	ette	liene puhu-neet
	3	eivät	puhu-ne		3	eivät	liene puhu-neet
受動		ei	puhu-tta-ne	受動		ei	liene puhu-ttu
<命令法現在>				<命令法完了>			
単	2	älä	puhu	単	3	älkөөn	olko puhu-nut
	3	älkөөn	puhu-ko				
複	1	älkөөmme	puhu-ko	複	3	älkөөt	olko puhu-neet
	2	älkөө	puhu-ko				
	3	älkөөt	puhu-ko	受動		älkөөn	olko puhu-ttu
受動		älkөөn	puhu-tta-ko				

る。前置詞、後置詞ともに用いられるが、後置詞の数の方が圧倒的に多い。比較構文で比較の基準を表わす名詞句は、形容詞(の比較級)の前に現われることも後ろに現われることもできる(表10の例文1a, 1b)。

疑問文は、文の成分のどれかに前接語 -ko/-kö を付けて文頭に移動させる(2b)か、文の成分のどれかを

疑問詞(の適当な格形)でおきかえて文頭に移動させる(2c)ことによってつくられる。いずれの場合も、文の他の成分の語順は、そのままに保たれるのが普通である。

従属節には、接続詞を用いるもの(3a, 3b)と動詞の不定形を用いるもの(4a, 4b)とがある。ただし、

〈表 7〉 動詞 **puhua** 「話す」の主要な不定形

第1 不定詞

短形	puhu-a	「話す」
長形	puhu-akse-ni	「私が話すために」
	puhu-akse-si	「あなたが話すために」
	puhu-akse-en	「彼(女)が話すために」
	puhu-akse-mme	「私たちが話すために」
	puhu-akse-nne	「あなたたちが話すために」
	puhu-akse-en	「彼(女)らが話すために」

第2 不定詞

内格	puhu-essa	「話しながら」
(受動)		
	puhu-tta-essa	「話しながら」
具格	puhu-en	「話すことで」

第3 不定詞

内格	puhu-ma-ssa	「話しながら」
出格	puhu-ma-sta	「話すことをやめて」
入格	puhu-ma-an	「話しに」
接格	puhu-ma-lla	「話すことによって」
欠格	puhu-ma-tta	「話さないで」

分 詞

能動 現在	puhu-va	完了	puhu-nut
受動	puhu-tta-va		puhu-tt-u
動作主分詞			puhu-ma

〈表 8〉 主要な派生接尾辞

- 「動作主, 行為者」を表わす名詞

-ja/-jä	laula-ja	< laula-
	「歌手」	「歌う」
- 「動作, 行為」を表わす名詞

-minen	lähte-minen	< lähte-
	「出発すること」	「出発する」
- 「行為の結果, 産物」を表わす名詞

-e	monist-e	< monista-
	「複写物」	「複写する」
- 「道具」を表わす名詞

-in	lask-in	< laske-
	「計算機」	「計算する」
- 「場所」を表わす名詞

-mo/-mö	katso-mo	< katso-
	「観客席」	「見る」
-la/-lä	kahvi-la	< kahvi
	「喫茶店」	「コーヒー」
- 集合名詞

-(i)sto/	kirja-sto	< kirja
-(i)stö	「図書館」	「本」
- 「性質, 状態」を表わす名詞

-(u)us/	vapa-us	< vapaa
-(y)ys	「自由」	「自由な」

- ある性質, 特徴をもっていることを表わす形容詞

-inen	aurinko-inen	< aurinko
	「日のあたる」	「太陽」
-kas/-käs	vara-kas	< vara
	「裕福な」	「富, 財」
- ある性質, 特徴が欠けていることを表わす形容詞

-ton/-tön	väri-tön	< väri
	「無色の」	「色」
- 副 詞

-sti	ahkera-sti	< ahkera
	「勤勉に」	「勤勉な」
-(i)ttain/	päiv-ittäin	< päivä
-(i)ttäin	「毎日」	「日, 一日」
- 使役動詞

-tta/-ttä-	maksa-tta-	< maksa-
	「支払わせる」	「支払う」

疑問文は, そのままの形で名詞節(間接疑問文)になることができる(3c). 関係節には, 関係詞を用いるもの(5b, 5c)と, 動詞の分詞形を用いるもの(5d)とがあり, 前者は主名詞の後ろに, 後者は主名詞の前に現われる. 後者のタイプの関係節が, 主名詞が関係節の中で主語または直接目的語として解釈される場合に限って用いられるのに対し, 前者のタイプの関係節にはそのような制限はない. 動詞の不定形を用いた従属節(関係節も含む)の主語は, 一般に, 属格の標示をうける(4a, 4b, 5d).

フィンランド語の格表示体系は, 基本的には, 対格型(自動詞文の主語=他動詞文の主語=主格, 他動詞文の直接目的語=対格)の1タイプと考えられる(2a, 5a, 8a)が, 典型的な対格型格表示の体系とは異なった特徴がはっきりと観察される.

対格型格表示の言語で対格表示される名詞句, すなわち, いわゆる直接目的語に相当する名詞句は, フィンランド語の格表示体系では, 分格で表示される分格目的語と, 分格以外の格(便宜上, <対格>と総称する)で表示される対格目的語の2つのタイプに分かれる. 言いかえると, フィンランド語における主語と直接目的語の間の形態論的対立は, <主格>対<対格>という単純な図式では表現できない.

2つの目的語のうち, 無標(unmarked)と考えられるのは分格目的語である. 対格目的語が用いられるのは, 一般に, 次の3つの条件がすべて満たされる場合である(8a, 9a, 10).

- 肯定文である.
- 行為(現象)が, 完結(完了)しているか, 完結(完了)することが予定されている.
- 行為(現象)が, 目的語の表わす対象の全体にお

〈表 9〉 複合名詞の第 1 構成要素の格

内格	työssä käynti 「仕事に通うこと」	← käy-「行く」 työ-ssä 「仕事」(内格)
出格	maasta muutto 「国外へ移住すること」	← muutta-「引越す」 maa-sta 「国」(出格)
入格	matkaan lähtijä 「旅行に出かける人」	← lähte-「出かける」 matka-an 「旅行」(入格)
接格	taksilla ajo 「タクシーに乗ること」	← aja-「乗る」 taksi-lla 「タクシー」(接格)
奪格	lomalta paluu 「休暇から帰ること」	← palaa-「帰る」 loma-lta 「休暇」(奪格)
向格	palstalle kirjoittaja 「コラムに寄稿する人」	← kirjoitta-「書く」 palsta-lle 「コラム」(向格)
様格	ministerinä olo 「大臣であること」	← ole-「ある」 ministeri-nä 「大臣」(様格)
変格	piispaksi tulo 「主教になること」	← tule-「なる」 piispa-ksi 「主教」(変格)
欠格	lakitta olija 「帽子をかぶらないでいる人」	← ole-「いる」 laki-tta 「帽子」(欠格)
具格	käsin lajittelu 「手で仕分けること」	← lajittele-「仕分ける」 käs-in 「手」(具格)

よぶものである。

以上の条件のうちの 1 つでも満たされない場合は、分格目的語が用いられる(8b, 9b, 11).

分格目的語が分格によって統一的な形態論的表示をうける(8b, 9b, 11)のに対し、対格目的語は、統語論的観点から立てられた概念で、形態論的な統一性を欠いている。

- 1) 6つの人称代名詞(minä, sinä, hän, me, te, he)と疑問詞 kuka 「誰」の場合は、語尾 -t をもつ、いわゆる対格形(10a, 10b)が存在し、対格目的語はこの形によって示される。
- 2) その他の場合、対格目的語は、単数では属格または主格と同じ形となり、複数では常に主格と同じ形となる。

	「彼」人称代名詞	「熊」(一般名詞, 単数)
主格	<u>hän</u>	<u>karhu</u>
属格	<u>hänen</u>	<u>karhun</u>
分格	<u>häntä</u>	<u>karhua</u>
〈対格〉	<u>hänet</u>	<u>karhun</u> <u>karhu</u>

対格目的語が一般名詞の場合、複数では常に主格形で現われるが、単数では属格形の場合と主格形の場合が存在する。一般名詞の単数の対格目的語が主格形となるのは、義務・当然等を表わす非人称構文(6b), 2人称の命令文(6c), 受動文(10b)などで、いずれも、動作主が主格で表わされないか、まったく明示されない構文である。動作主を表わす名詞句は、6b のような非人称構文では属格で現われ、6c のような命令文では通常現われず、10b のような受動文ではまったく現われることができない。

分格目的語のみをとる他動詞の中には、7 のように、目的語をもつが主語(主格名詞句)のない構文をつくるものがある。この構文をつくる動詞は、一般に、人の精神的あるいは肉体的状態を表わし、目的語も人に限られる。この非人称構文の分格目的語は、文頭に現わ

れるが、6b のような非人称構文の属格名詞句とともに、主語的性が非常に強いという特徴をもっている。

フィンランド語で、「受動(passiivi)」とよばれている不定人称構文には、次のような特徴がある。

- 1) 能動文の主語にあたる成分(動作主)が現われることができない(10b, 11b)。
- 2) 能動文の目的語に対応する名詞句が、受動文でも、目的語の格表示(ただし、一般名詞の対格目的語は主格で表示される)をうける(10b, 11b)。
- 3) 動詞は、「受動形」とよばれる人称のない形(不定人称形)をとる(10b, 11b, 12b)。
- 4) 自動詞が自由に受動形になる(12b)。
- 5) 人間の動作、行為を表わす場合以外は用いられない。

使役には、使役を表わす派生動詞(使役動詞)を用いる方法(13b, c, d)と、 antaa 「与える」、 saada 「得る」、 panna 「置く」などの補助動詞を用いて分析的に表現する方法(14)とがある。前者の方法が可能な場合は、動詞が語彙的に限られており、後者の方法が広く用いられる。

格表示との関連で注目すべき点に、「存在文(existential sentence, eksistentiaalilause)」とよばれる自動詞構文がある。存在文をつくることのできる自動詞は、少なくとも 270 語ほど指摘されているが、いずれも、広い意味で、「存在する/しない」ないしは「存在するようになる(生じる, 現われる, 等)/存在するのをやめる(消える, なくなる, 等)」という意味範疇に属する動詞として特徴づけられる点で共通性がある。存在文は、「場所格名詞句+自動詞+主格または分格の名詞句」という構造をしており、動詞が olla 「ある」ならば、英語の there 構文や have 動詞を用いた所有文に相当する意味をもつ文として用いられる(15, 16)。場所格名詞句ではない方の名詞句を存在文の主語と見なすとすれば、存在文は、一般の自動詞文(「普通文 normal sentence, normaalilause」とよばれる)と比べて、次のような特徴をもつ。

〈表 10〉 文 の 構 造

1. a. Matti on Mikko-a pite-mpi. 「マッティはミッコより背が高い」
 ~である ミッコ(分格) 長い(比較)
- b. Matti on pite-mpi kuin Mikko. (同上)
 より ミッコ
2. a. Mikko menee kotiin. 「ミッコが家へ(帰って)行く」
 行く 家へ
- b. Menee-kö Mikko kotiin? 「ミッコは家へ帰って行きますか?」
 行く(疑問)
- c. Minne Mikko menee? 「ミッコはどこへ行きますか?」
 どこへ
3. a. Minä tiedän, että Mikko on kotona. 「わたしはミッコが家にいることを知っ
 わたし 知っている (接続詞) いる 家で
 ている」
- b. Kun Matti saapui, Liisa oli 「マッティがやって来たとき、リーサは出
 ~のとき 到着した リーサ ~であった
 かけるところだった」
 lähdössä.
 出かけるところで
- c. Liisa kysyi, menee-kö Mikko kotiin. 「リーサはミッコが家へ帰って行くかど
 質問した
 うか質問した」
4. a. Matti sano*i* Miko-n 「マッティはミッコが家にいると言った」
 言った ミッコ(属格)
ole-va-n kotona.
 いる(現在分詞・対格) 家で
- b. Mati-n saapu-essa Liisa 「マッティがやって来たとき、リーサは出
 マッティ(属格) 到着する(第2不定詞・内格)
 oli lähdössä.
 かけるところだった」
5. a. Mikko osti kirja-n kirjakaupa-sta. 「ミッコが本屋で本を買った」
 買った 本(対格) 本屋(出格)
- b. kirja, jo-n-ka Mikko osti kirjakaupa-sta 「ミッコが本屋で買った本」
 本 (関係詞・対格)
- c. kirjakauppa, jo-sta Mikko osti kirja-n 「ミッコが本を買った本屋」
 本屋 (関係詞・出格)
- d. Miko-n kirjakaupa-sta osta-ma kirja 「ミッコが本屋で買った本」
 ミッコ(属格) 買う(動作主分詞)
6. a. Sinä osta-t kirja-n. 「あなたが本を買う」
 あなた 買う 本(対格)
- b. Sinu-n pitää osta-a kirja. 「あなたは本を買わなければならない」
 あなた(属格) ねばならない 買う(不定詞) 本(主格)
- c. Osta kirja! 「(あなたは)本を買いなさい」
 買う(命令形) 本(主格)
7. Mikko-a nukuttaa. 「ミッコは眠い」
 ミッコ(分格) 眠くさせる
8. a. Liisa ostaa kirja-n. 「リーサが本を買う」
 買う 本(対格)
- b. Liisa ei osta kirja-a. 「リーサが本を買わない」
 買わない 本(分格)
9. a. Liisa on lakaissut lattia-n. 「リーサが床を掃いてしまった」
 掃いた(現在完了) 床(対格)
- b. Liisa lakaisee lattia-a. 「リーサが床を掃いている」
 掃く 床(分格)

10. a. Liisa ampui karhu-n (häne-t). 「リーサが熊(彼)を撃った(撃ち殺した)」
撃った 熊(対格) 彼(対格)
- b. Karhu (Häne-t) ammu-tt-iin. 「熊(彼)が撃たれた(撃ち殺された)」
熊 彼(対格) 撃たれた(受動)
11. a. Liisa ampui karhu-a (hän-tä). 「リーサが熊(彼)を撃った(命中しなかつた, あるいは傷が致命的でなかった)」
熊(分格) 彼(分格)
- b. Karhu-a (Hän-tä) ammu-tt-iin. 「熊(彼)が撃たれた(同上)」
12. a. Huomenna he menevät Helsinki-in. 「あす彼らがヘルシンキへ行く」
あす 彼ら 行く ヘルシンキ(入格)
- b. Huomenna men-nä-än Helsinki-in. 「あすヘルシンキへ行く」
行く(受動)
13. a. Pekka laulaa (laulu-n). 「ペッカが(歌を)歌う」
歌う 歌(対格)
- b. Liisa laula-tta-a Pekka-a. 「リーサがペッカに歌わせる」
歌わせる(使役) ペッカ(分格)
- c. Liisa laula-tta-a (Peka-lla) laulu-n. 「リーサが(ペッカに)歌を歌わせる」
ペッカ(接格)
- d. Marja laula-tu-tta-a (Liisa-lla) Pekka-a. 「マリヤが(リーサを通じて)ペッカに歌わせる」
歌わせる(使役) リーサ(接格)
14. a. Liisa antoi Peka-n laula-a. 「リーサがペッカに歌わせた」
与えた ペッカ(属格) 歌う(不定詞)
- b. Liisa sai Peka-n laula-ma-an. 「リーサがペッカに歌わせた」
得た ペッカ(対格) 歌う(第3不定詞・入格)
- c. Liisa pani Peka-n laula-ma-an. 「リーサがペッカに歌わせた」
置いた ペッカ(対格)
15. a. Lauku-ssa on kirja (kirjo-ja). 「かぼんの中に本がある」
かぼん(内格) ある 本(単主格) 本(複分格)
- b. Lauku-ssa ei ole kirja-a (kirjo-ja). 「かぼんの中に本はない」
ない 本(単分格)
16. a. Liisa-lla on kirja (kirjo-ja). 「リーサは本をもっている」
リーサ(接格)
- b. Liisa-lla ei ole kirja-a (kirjo-ja). 「リーサは本をもっていない」
17. a. Kahvila-an tuli tyttö (tyttö-jä). 「喫茶店へ少女(たち)がやって来た」
喫茶店(入格) 来た 少女(単主格) 少女(複分格)
- b. Kahvila-an ei tullut tyttö-ä (tyttö-jä). 「喫茶店へ少女(たち)が来なかった」
来なかった 少女(単分格)
18. a. Kirja on (ei ole) lauku-ssa. 「本はかぼんの中にある(ない)」
- b. Kirja-t ovat (eivät ole) lauku-ssa. 「本(複数)はかぼんの中にある(ない)」
本(複主格) ある(複) ない(複)
19. a. Tyttö tuli (ei tullut) kahvila-an. 「少女は喫茶店へ来た(来なかった)」
- b. Tytö-t tulivat (eivät tulleet) kahvila-an. 「少女たちは喫茶店へ来た(来なかった)」
少女(複主格) 来た(複) 来なかった(複)

- 1) 普通文の主語は、常に主格で表示される(18, 19)が、存在文の主語は、肯定文で主格または分格(15a, 16a, 17a)、否定文では分格(15b, 16b, 17b)で表示される。
- 2) 普通文の動詞は、人称、数において主語と一致する(18, 19)が、存在文の動詞は、常に3人称単数形である(15, 16, 17)。
- 3) 普通文の主語は、普通、動詞の前におかれる(18,

19)が、存在文の主語は、動詞の後ろにおかれるのが普通である(15, 16, 17)。

このように、存在文の主語は、主語としての特性をいくつか欠いているほか、格表示の点で、他動詞文(とりわけ、単数の対格目的語を主格で表示する構文)の目的語に準じた扱いをうけるという特徴をもつ。

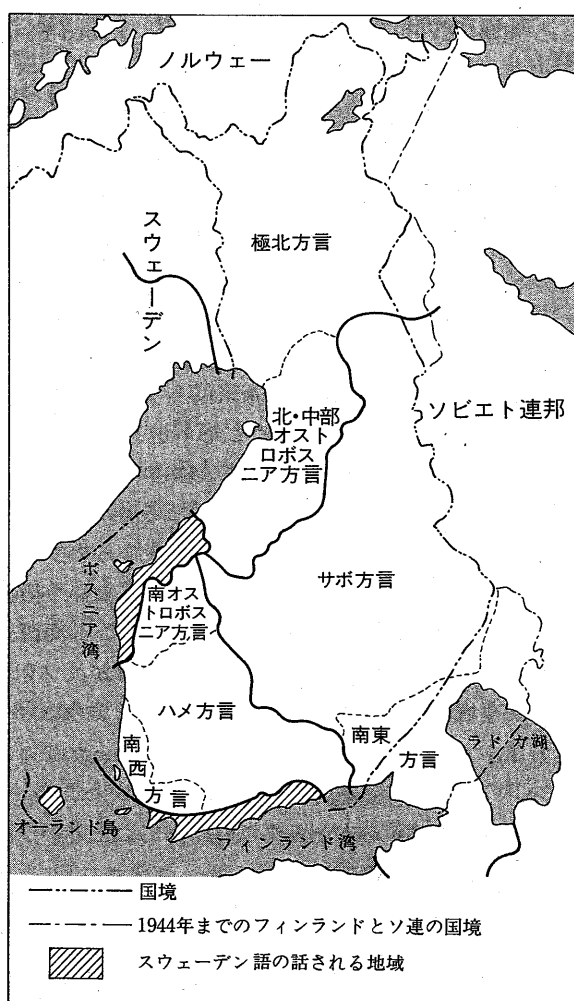
[方言] フィンランド語の話されている地域は、フィンランド共和国の領土とほぼ一致する。ただし、

オーランド(Åland, フィンランド語名 Ahvenanmaa) 島とその周辺の島々, および, フィンランド中部のボスニア湾(Pohjanlahti, スウェーデン語名 Bottniska viken) 岸地方は, スウェーデン語単用地域となっており, これらの地域の周辺, および, 南部のフィンランド湾岸地方は, フィンランド語とスウェーデン語の併用地域である(図1). なお, ソ連領内の, ラドガ(Ladoga, フィンランド語名 Laatokka) 湖の北岸, および, 同湖とフィンランド湾にはさまれた地峡地帯には, 第2次大戦前まで, かなりの数のフィンランド語系住民が住んでいたが, 1944年に, これらの地域がソ連領になったのに伴い, ほとんどがフィンランド本土へ移住した. フィンランド北部の, ノルウェーとの国境地帯には, サミー語(ラップ語)を母語とするサーミ人(ラップ人)が住んでいる.

フィンランド語の方言区分では, 普通, 7つの方言区域がたてられている(図1). これらの諸方言は, 大きく西部諸方言(länsimurteet)と東部諸方言(itämurteet)に2分される.

西部諸方言

〈図1〉 フィンランド語の方言区画



- 1) 南西方言(lounaismurteet)
- 2) ハメ方言(hämäläismurteet)
- 3) 南オストロボスニア方言 (Etelä-Pohjanmaan murre)
- 4) 北・中部オストロボスニア方言 (keski- ja pohjoispohjalaiset murteet)
- 5) 極北方言(Peräpohjolan murteet)

東部諸方言

- 6) サボ方言(savolaismurteet)
- 7) 南東方言(kaakkoismurteet)

東西の諸方言の間には, 次のような違いがみられる(表11).

- 1) 母音間の -t- の弱階程(フィン祖語 *ð[ð]; 共通語 -d-)が, 東部諸方言で一般に消失しているのに対し, 西部諸方言では何らかの形で保たれている.
- 2) 共通語の -ts- (フィン祖語 *-ts-) が, 東部諸方言では, 一般に, -ht-, -ss- 等で, 西部諸方言では -tt-, -ʒʒ- [θθ] 等で現われる.
- 3) -lke- または -rke- の, -k- の弱階程を表わす子音(フィン祖語 *-ɣ- [ɣ]; 共通語 -j-) が, 東部諸方言で一般に消失, 西部諸方言では -j- で現われる.
- 4) 西部諸方言で, 一般に, -aa-, -ää- (共通語 -aa-, -ää-) であるのに対し, 東部諸方言では, -oa-, -ua-; -eä-, -iä- と二重母音化している.
- 5) 東部諸方言で, 一般に, -uo-, -yö-, -ie- (共通語 -uo-, -yö-, -ie-) であるのに対し, 西部諸方言では, 一般に, -ua-, -yä-, -iä-, -ia- のように, 二重母音の後半の弛緩化が起こっている.
- 6) 語幹が1音節の動詞の, 3人称単数現在形の語尾が, 東部諸方言では, 一般に, -p(i) (フィン祖語 *-pi) であるのに対し, 西部諸方言ではゼロ(共通語もゼロ)である.
- 7) 内格の語尾が, 東部諸方言では, 一般に, -ssa/-ssä (共通語 -ssa/-ssä) であるが, 西部諸方言では -sa/-sä である.
- 8) 東部諸方言と西部諸方言の間には, 語彙的な違いがある(共通語形に下線).

共通語(yleisikieli) は, さまざまな方言の要素をとり込んでいるため, 現在では, どれか特定の方言に基づいているとは言えなくなっている. 最近では, マスコミなどを通して, 首都ヘルシンキの話しことばが, しだいに全国に浸透しつつある. ヘルシンキの話しことばを共通語と比較すると, たとえば, 次のような違いが観察される(表12).

- 1) 語末の母音や子音が, しばしば消失している.
- 2) 第2音節以降の二重母音 -ai-, -oi- などが, -a-, -o- などとなっている.

〈表 11〉 東西の方言の比較

共通語		西部	東部
1) pata : padan	「深なべ」	paran, palan, padan, padan	paan
2) metsä	「森」	mettä, meššä	mehtä, messä
3) kulke- : kuljen	「歩く」	kulke- : kuljen	kulke- : kulen
kurke- : kurjen	「ツル」	kurke- : kurjen	kurke- : kuren
4) maa, pää	「土地」「頭」	maa, pää	moa, peä; mua, piä
5) tuo, työ	「あれ」「仕事」	tua, työ	tuo, työ
mies, miekka	「男」「剣」	miäs, miakka	mies, miekka
6) saa	「～してよい」	saa	soap(i), suap(i)
juo	「飲む」	jua	juop(i)
7) tässä kylässä	「この村で」	täsä kyläsä	tässä kylässä
8) 「夕方」		ehtoo	ilta
「夏」		suvi	kesä
「小麦」		nisu	vehnä
「話す」		puhua	haasta
「葉ぼうき(サウナ用)」		vihta	vasta
「雄牛」		sonni, mulli	härkä
「～する気にならない」		en viitsi	en kehtaa

- 3) -ea, -eä が, -ee となっている。
 4) 代名詞や数詞の語形が, 短くなったり, 変わったりしている。
 5) よく使われるいくつかの動詞の語幹が, 1音節化している。
 6) 所有接尾辞が用いられない傾向がある。
 7) 3人称の代名詞, および, 動詞の変化形が異なっている。

- 8) 動詞の1人称複数形の代わりに, 受動形が用いられる。

【歴史】 フィンランド語の成立には, 後期フィン祖語(myöhäiskantasuomi, Late Proto-Finnic)が統一性を失って分裂していく過程で成立した, 4つの古方言が関与したと考えられている。これら4つの古方言に対応するのが, スオミ(suomi), ハメ(häme), サボ(savo), カレリア(karjala)で, それぞれ, 現在の, 南西方言, ハメ方言, サボ方言, 南東方言(俗に言う「カレリア方言」)の基盤となった。今日, フィンランド全体について用いられる Suomi「フィンランド」, suomi「フィンランド語」, suomalainen「フィンランド人」という語は, 本来は, ハメ地方(Häme), サボ地方(Savo), カレリア地方(Karjala)や, ハメ人(hämäläinen), サボ人(savolainen), カレリア人(karjalainen)に対立することばであった。トゥルク(Turku, スウェーデン語名 Åbo)を中心とする地方が, Varsinais-Suomi「本来のスオミ」という旧称をもつのは, その名残りである。フィンランド南西部のごく狭い地域に関して用いられたことばが, フィンランド全域をさすことばとして用いられるようになったのは, スウェーデンとのかかわりの強かったフィンランドの政治的, 宗教的な中心が, 長期にわたり, 「スオミ地方」の中心トゥルクにおかれていたという歴史的事情によるものである。

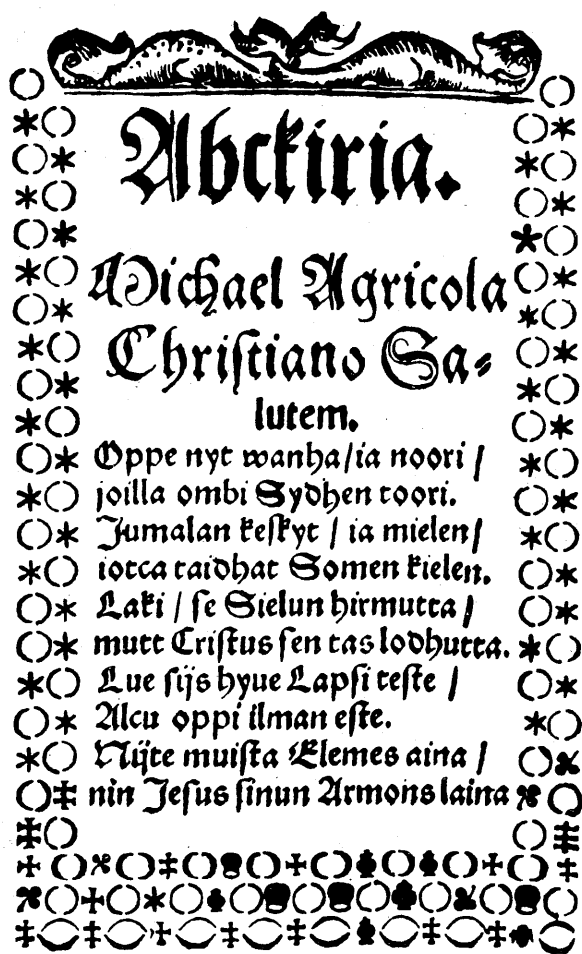
フィンランド語の歴史は, 文語の成立と発達を基準にして, 普通, 4つの時期に分けられる。

第1期は, 文語が成立する1540年代以前の時代で,

〈表 12〉 共通語とヘルシンキ方言の比較

共通語		ヘルシンキ方言
1) yksi	「1」	yks
puhunut	「話した」	puhunu
2) punainen	「赤い」	punanen
semmoinen	「そのような」	semmonen
3) kauhea	「ひどい」	kauhee
tärkeä	「重要な」	tärkee
4) minä	「私」	mä
minun	「私の」	mun
kaksikymmentäviisi「25」		kakskytviisi
5) minä olen	「私は～である」	mä oon
sinä tulet	「あなたが来る」	sä tuut
6) kirjani	「私の本」	mun kirja
7) hän tulee	「彼が来る」	se tulee
he tulevat	「彼ら来る」	ne tulee
8) me puhumme		me puhutaan
	「私たちは話す」	
puhukaamme		puhutaan
	「さあ話しましょう」	

〈図2〉 アグリコラ『ABCの本』のタイトル
ページ



古文書などに残っているフィンランド語の固有名詞などを除くと、文献資料のまったく残っていない時期である。フィンランド語では、後期フィン祖語の時代以降、あまり大きな音変化が起こっていないことが、方言間の比較や、他のバルト・フィン諸語との比較から明らかにされている。

第2期は、古期文語 (vanha kirjasuomi, Altfinnisch) の時代とよばれ、1540年代から1820年ごろまでをさす。最古のフィンランド語の本は、1543年に印刷されたと推定されるアグリコラ (Mikael Agricola, c. 1510~57) の『ABCの本』 (Abckiria) である (図2)。アグリコラの筆になるもので印刷されたものは、1548年の『新約聖書』のフィンランド語訳 (Se Wsi Testamenti) を含めて、約2,400ページにもものぼる。アグリコラと同時代のほかの聖職者による、フィンランド語の写本、手稿も、比較的多く現存している。この時期の文語は、表記法が、ラテン語、スウェーデン語、ドイツ語の正書法の影響を受けており、また、音韻、形態、統語、語彙のいずれの点でも、当時の政治、文化の中心トゥルクのあった南西方言地域を中心とす

る、フィンランド西部の諸方言に基づいたものであった。

フィンランド語の文語の確立に決定的な役割を果たしたのは、1642年に完成した聖書の翻訳である (Biblia, se on : Coco Pyhä Ramattu, Suomexi)。この聖書訳は、1776年に大幅な改訂をうけるが、以後、1930年代に新訳が完成するまで用いられた。

最初のフィンランド語文法 (Eskil Petraeus, Linguae finnicae brevis institutio) が出されたのは、1649年である。スウェーデン語とラテン語を併記した語彙集 (Henrik Florinus, Nomenclatura rerum brevissima latino-sveo-finnonica, 1678; Daniel Juslenius, Suomalaisen Sana-Lugun Coetus, 1745) が、古期文語の時代に出されている。

第3期 (1820年から1870年ごろまで) は、初期現代フィンランド語 (varhaisnykysuomi, Frühneufinnisch) の時代とよばれる。この時代になると、フィンランド語の文語は、教会関係者たちの専有物ではなくなり、教会に直接関与しない場面でも用いられるようになった。

使用範囲の拡大に伴って、当時のフィンランド語文語の欠陥もはっきりと意識されはじめた。当時使われていた書きことばは、西部諸方言に依拠しすぎているために、東部のサボ地方やカレリア地方の出身者にとって、あまり使い勝手のよいものではなかったし、主として、宗教的用途に用いられてきた言語形態であったために、語彙や表現に、スウェーデン語やラテン語の影響が強くみられ、フィンランド語としては不自然な点が多かった。

こうして、フィンランド語は、1820年ごろから1840年代まで、「方言間の抗争 (murteiden taistelu)」とよばれる、百花繚乱の言語改革の時期を体験することになる。この結果、音韻、形態の面では、ひき続き西部諸方言の特徴を保持しつつ、語彙や表現の面では、東部諸方言の要素を大幅にとり込んだ、東西両方言の折衷とも言える言語形態ができあがった。その基盤の上に、やがて、今日の共通語が成立するのである。

この方言間抗争の過程で決定的な役割を果たした人物が、リョンルート (Elias Lönnrot, 1802~84) であった。リョンルートは、1831年に設立された「フィンランド文学協会 (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura)」の援助のもとに、カレリアを中心とする地域を旅行し、収集した口承文学を編集して、叙事詩『カレワラ』 (Kalevala, 1835, 1849) として出版し、反響をよんだ。東部諸方言の語彙や表現は、フィンランド語の最初の文学作品『カレワラ』を通じて、共通語にとり入れられたと言ってよい。また、リョンルートが晩年に著した『フィンランド語-スウェーデン語辞典』 (Suoma-

lais-Ruotsalainen Sanakirja, 1867-80)は、『現代フィンランド語辞典』(*Nykysuomen sanakirja*, 1951-61)が出されるまで、最大のフィンランド語の辞書としての地位を保った。

フィンランド語の小説、劇文学の創始者とされるのは、『カレワラ』に題材をとった『クレルボ』(*Kullervo*, 1864)をはじめとする数々の戯曲や、小説『七人兄弟』(*Seitsemän veljestä*, 1870)を著したキビ(Aleksis Kivi, 1834-72)である。

1863年には、ロシア皇帝アレクサンドル2世により「言語布告(kieliasetus)」が出され、フィンランド語にスウェーデン語と対等の地位を与えることが宣言されたが、両言語が法的に完全に対等になるのは、フィンランド語系住民の住む地域の役人にフィンランド語の使用が義務づけられる1902年のことである。

第4期(1870年以降、現在まで)は、現代フィンランド語(nykysuomi, Neufinnisch)の時代とよばれる。高等教育をはじめとする社会のあらゆる分野で機能している言語を文化言語とよぶとすれば、フィンランド語は、ようやく、このころから、文化言語としての道を歩みはじめたと言ってよい。1876年には、「母語協会(Kotikielen Seura)」が設立され、フィンランド語の「洗練(kielenviljely)」と「整備(kielenhuolto)」、および、フィンランド語の研究者の養成に力が入れられる。19世紀末に、セタラ(Eemil Nestor Setälä, 1864-1935)が著した『フィンランド語文論』(*Suomen kielen lauseoppi*, 1880)と『フィンランド語文法』

(*Suomen kielioppi*, 1898)は、現行のフィンランド語の標準文法の枠組みをつくった。この2つの本は、その後、数限りない改訂の手が加えられたものの、現在でも価値を失っていない。

1917年に、フィンランドが独立すると、フィンランド語は、スウェーデン語とともにフィンランドの公用語となった。やがて、フィンランド語系の知識人の層が厚くなり、スウェーデン語系知識人との勢力関係が逆転する。ハクリネンの『フィンランド語の構造と発達』(Lauri Hakulinen, *Suomen kielen rakenne ja kehitys*, I-1941, II-1946)、ペンティラの『フィンランド語文法』(Aarni Penttilä, *Suomen kielioppi*, 1957)、『現代フィンランド語辞典』(*Nykysuomen sanakirja*, 1951-61)、『フィンランド語語源辞典』(*Suomen kielen etymologinen sanakirja*, 1955-81)などの出版は、フィンランド語研究が、フィンランド語が文化言語として成熟するのとあいまって進展してきたことを物語っている(表13を参照)。

[語彙] 派生語や複合語を除いたフィンランド語の語彙のうちで、借用語(外来語)は、約20%と考えられている。

借用語のうちでもっとも古いものは、すでにフィン・ウゴル祖語の時代(紀元前4000年ごろまで)に、インド・ヨーロッパ語(インド・イラン語派)から借用されたと考えられる語である。次に古い借用語のグループは、前期フィン祖語(varhaiskantasuomi)の時代(紀元前1500～前1000年ごろ)に、バルト諸語から入ったと考えられているものである。また、後期フィン祖語の時代(紀元前1000～紀元0年ごろ)には、多数の語がゲルマン語から借用されたと考えられている。その後も、スラブ語(主としてロシア語)、スウェーデン語から、多数の語彙がフィンランド語に入っている(表14を参照)。

フィンランド語の語彙の中で、少なくともフィン・ウゴル祖語の時代にまで遡ることのできるもののうち、主な語を表15にあげる。

[辞書]

Nykysuomen sanakirja (Werner Söderström, Helsinki, 1951-61)——フィンランドの国語辞典としては唯一のもの。見出し語数約20万語。すべての変化語について、活用のタイプが指示されている。Hurme, R., Malin, R.-L. and O. Syväoja (1984), *Uusi suomi-englanti suursanakirja / Finnish-English General Dictionary* (Werner Söderström, Helsinki)——フィンランド語-英語辞典としてはもっとも大きく、見出し語数約16万語。

Hurme, Raija and Maritta Pesonen (1973,

<表13> 文語の変遷

『新約聖書』「マルコスによる福音」12:13

1548年(Agricola)

Ja he lehetit henen tygens mwrtamat Phari-seusist ia Herodesen paluelioist / että he sol-miaisit henen Sanasa.

1642年

Ja he lähetit hänen tygöns muutammat Phari-seuxist ja Herodianeist / solmeman händä sanoisa.

1776年

Ja he lähetit hänen tygönsä muutammat Pharisieuxista ja Herodianeista, solmemaan händä sanoisa.

1938年

Ja he lähettivät hänen luoksensa muutamia fariseuksia ja herodilaisia kietomaan häntä sanoilla.

「さて人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデス派の人を数人イエスのところに遣わした」(共同訳)

〈表 14〉 フィンランド語の語彙の中の借用語

インド・ヨーロッパ語(インド・イラン語派)から(フィン・ウゴル祖語時代):

jyvä 「(穀物の)粒」, orpo 「孤児」, mehiläinen 「ミツバチ」, sarvi 「(動物の)角」, porsas 「豚」, sata 「100」, vasara 「槌」

バルト諸語から(前期フィン祖語時代):

hammas 「歯」, heinä 「干草」, herne 「エンドウ豆」, hirvi 「ヘラジカ」, lohi 「サケ」, meri 「海」, seinä 「壁」, silta 「橋」, tuhat 「1,000」, tytär 「娘」, villa 「羊毛」

ゲルマン語から(後期フィン祖語時代):

hame 「スカート」, ja 「と(接続詞)」, juusto 「チーズ」, kaunis 「美しい」, kauppa 「商業, 商店」, kello 「鐘, 時計」, kulta 「金」, kuningas 「王」, lammas 「ヒツジ」, leipä 「パン」, naula 「くぎ」, neula 「針」, pelto 「畑」, raaka 「生の」, rauta 「鉄」, rengas 「輪」, rikas 「富裕な」, ruis 「ライ麦」, sairas 「病気の」, sama 「同じ」, viikko 「週」, äiti 「母親」

スラブ語から(比較的新しいロシア語からのものも含む):

ikkuna 「窓」, lusikka 「スプーン」, raamattu 「聖書」, risti 「十字」, tavara 「品物」, vapaa 「自由な」, laatia 「作成する」, leima 「スタンプ」, siisti 「清潔な」, viesti 「通信」

スウェーデン語から(またはスウェーデン語経由でフィンランド語に借用されたもの):

housut 「ズボン」, hylly 「棚」, kampa 「櫛」, lääkäri 「医者」, markka 「マルカ(貨幣単位)」, sakset 「はさみ」, sänky 「ベッド」, takki 「上着」, tunti 「1時間」, tuoli 「腰掛」, uuni 「かまど」, vaaka 「はかり」, herra 「紳士」, laatikko 「箱」, lasi 「ガラス」, naapuri 「隣人」, rouva 「婦人」, väri 「色」, tasku 「ポケット」, kartta 「地図」, koulu 「学校」, peili 「鏡」, peruna 「ジャガイモ」, taulu 「絵, 表」, tusina 「1ダース」, viina 「酒」, öljy 「油」

〈表 15〉 フィンランド語の語彙(少なくともフィン・ウゴル祖語にまで起源をたどることのできるもの)

親族等に関するもの: isä 「父親」, poika 「息子, 少年」, neiti 「乙女」, väki 「群衆」, nimi 「名前」

人体に関するもの: pää 「頭」, silmä 「目」, kieli 「舌, 言語」, suu 「口」, käsi 「手」, jalka 「足」, sydän 「心臓」, maksa 「肝臓」, luu 「骨」, veri 「血」

動植物に関するもの: puu 「木」, koivu 「シラカバ」, kuusi 「トウヒ, モミ」, sieni 「キノコ」, kala 「魚」, lintu 「鳥」, muna 「卵」, voi 「バター」

代名詞: minä 「私」, sinä 「あなた」, hän 「彼, 彼女」, me 「私たち」, te 「あなたたち」, he 「彼ら, 彼女ら」, tämä 「これ」, tuo 「あれ」, se 「それ」, nämä 「これら」, nuo 「あれら」, ne 「それら」, ken ~ kuka 「誰」, mikä 「何」, muu 「他の」

数詞: yksi 「1」, kaksi 「2」, kolme 「3」, neljä 「4」, viisi 「5」, kuusi 「6」

自然に関するもの: syksy 「秋」, talvi 「冬」, kuu 「月」, yö 「夜」, joki 「川」, maa 「大地」, metsä 「森」, kivi 「石」, ilma 「空気」, vesi 「水」, jää 「氷」, lumi 「雪」, tuli 「火」

その他: suksi 「スキー」, uusi 「新しい」, ala- 「下」, ylä- 「上」, esi- ~ ete- 「前」, taka- 「後」

動詞: antaa 「与える」, elää 「生きる」, juoda 「飲む」, kulkea 「歩く」, kuolla 「死ぬ」, kuulla 「聞く」, lukea 「読む」, mennä 「行く」, nähdä 「見る」, olla 「ある, いる」, panna 「置く」, pelätä 「恐れる」, pitää 「手にもつ」, syödä 「食べる」, tehdä 「作る」, tulla 「来る」, tuoda 「もってくる」, uida 「泳ぐ」, viedä 「もっていく」

1976³), *Englantilais-suomalainen suursanakirja/English-Finnish General Dictionary* (Werner Söderström, Helsinki)——英語-フィンランド語辞典としてはもっとも大きいもの。

Tuomi, Tuomo (ed.) (1972, 1980⁴), *Suomen kielen käänteissanakirja / Reverse Dictionary of Modern Standard Finnish* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)——*Nykysuomen sanakirja* に基づいて作られた, フィンラン

ド語の逆引き辞典。

Saukkonen, P., Haipus, M., Niemikorpi, A. and H. Sulkala (1979), *Suomen kielen taajuussanasto/A Frequency Dictionary of Finnish* (Werner Söderström, Helsinki)——1960年代の書きことば資料をもとに作られた, フィンランド語の頻度辞典。収録語数約12,500語。

Suomen kielen etymologinen sanakirja I-VIII (Suomalais-ugrilainen Seura, 1955-81)——ウ

ラル比較言語学の成果に依拠して編集された、フィンランド語の語彙の語源辞典。

〔参考文献〕

- Fromm, Hans (1982), *Finnische Grammatik* (Carl Winter, Heidelberg)
- Hakulinen, Auli and Fred Karlsson (1979), *Nyky-suomen lauseoppia* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)
- Hakulinen, Lauri (1941, 1946 ; 1961²; 1968³; 1979⁴), *Suomen kielen rakenne ja kehitys I-II* (Otava, Helsinki)
- (1953, 1955), *Развитие и структура финского языка I-II* (Изд. иностранной литературы, Москва)
- (1957, 1960), *Handbuch der finnischen Sprache* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- (1961), *The Structure and Development of the Finnish Language* (Indiana University, Bloomington)
- Ikola, Osmo (1961), *Lauseopin kysymyksiä* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)
- (1962), "Entwicklungszüge in der Ausbildung der finnischen Schriftsprache", *Ural-Altische Jahrbücher* 34
- (ed.) (1968), *Suomen kielen käsikirja* (Weilin+Göös, Helsinki)
- (ed.) (1971), *Nyky-suomen käsikirja* (Weilin+Göös, Helsinki)
- Itkonen, Terho (1979), "Subject and Object Marking in Finnish: An inverted ergative system and an 'ideal' ergative sub-system", in Frans Plank (ed.), *Ergativity. Toward a Theory of Grammatical Relations* (Academic Press, London)
- Karlsson, Fred (1983), *Finnish Grammar* (Werner Söderström, Helsinki)
- Penttilä, Aarni (1957, 1963²), *Suomen kielioppi* (Werner Söderström, Helsinki)
- Rapola, Martti (1945), *Vanha kirjasuomi* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)
- (1947), *Johdatus suomen murteisiin* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)
- Pulkkinen, Paavo (1972), *Nyky-suomen kehitys* (Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, Helsinki)
- Vesikansa, Jouko (1978), *Johdokset* (Werner Söderström, Helsinki)

〔参 照〕 『大辞典』ウラル語族

(松村 一登)